

大学人、鈴木礼暁教授

法学部長 前 原 宏 一

鈴木礼暁教授は、私が本学に赴任した当時の法学部長であった。その後、前学部長を経て、今では私が学部長を受け継ぐ番になり、翻って考えると大きな時の流れを実感する。その当時の印象は、非常に気遣いされる先生であるというものであった。私の赴任歓迎会などでは、赴任当初の緊張をほぐすために、カラオケで先生十八番の「ランナー」を走りながら熱唱され、場を和ませてくれたことを覚えている。

そうした気遣いは、学生とのコミュニケーションの姿勢にも現れていた。本学は私が赴任した当時から「教育重視型大学」を標榜しており、赴任に際して、それが何を意味しているのかという話になった折、鈴木教授は「僕はそれは学生と一緒にいる時間を多くすることだと理解している」とのアドバイスを頂いたが、確かに、鈴木教授の研究室には多くの学生が教授をしたって訪れており、鈴木教授もそれを広く受け入れていた。鈴木教授の寛容さに癒されていた学生は多かったのでは無かろうか。その後になって全学的なアドバイザー制度などが生まれ、アドバイザーとなった教員が担当の学生をフォローするというシステムが作られたが、鈴木教授は、そうしたシステムが作られる前から、独自に学生のアドバイザーとして学生と関わり、「教育重視型大学」を推進していたのである。

私は赴任から一年後に、鈴木学部長の下での教務主任を仰せつかり、その後の二年間、学部運営や教務事項を勉強させていただいた。赴任して一年の間、校務などについての勉強を怠っていたこともあり、

教務主任としては多くの失敗をし、鈴木学部長にも大分迷惑をかけたと思われるが、鈴木学部長は何時も鷹揚に構えており、彼から不満の言葉を聞くことはなかった。一方、鈴木学部長は、その専門が政治学であったこともあって、学内において政治的交渉を進めることに長けており、法学部独自のカリキュラム展開についても、持ち前の政治的交渉力を駆使して、その予算獲得などについて学内の了承を得ることに成功し、特色ある法学部教育の基盤を作り上げていった。その一端が、法実務コース、公務員コース、企業法務コースといったコース制の採用と、それらをバックアップする公務員試験や資格試験対策のアウトソーシング科目の導入であり、そうしたコースの基本的枠組みや、アウトソーシングによる授業展開の一部は現在も受け継がれている。他にも鈴木学部長時代に基盤が築かれ、今もそれが受け継がれ発展しているものとして、道内各市町村長による「まちづくり」のリレー講座がある。これは、現にまちづくりに携わった現役首長に、実際に生じた問題点やそれを克服するための苦心や苦勞を講義してもらうというもので、学生だけではなく、地域住民の方々にもオープンな講座とした。こうした実践に目を向けようとする鈴木学部長の目論見は、正に時代のニーズを射たもので、この講座は社会的にも一定の評価を得ることとなった。

だが鈴木教授が学部長として行った最大の仕事は、自治行政学科の設置に向けての道を築いたということであった。ただ、実際に自治行政学科の設置に向けての具体的な作業に没頭するのは、二期 4 年にわたる学部長の任期の終了時で、私も教務主任の任期を終えており、自治行政学科設置準備室の委員として、共にその仕事に携わった。してみると結構ともに仕事をこなしてきたものだと思う。この自治行政学科設置に向けての鈴木教授の熱意は並々ならぬものがあり、カリキュラムの編成に頭を悩ましながら、法人との交渉、文部科学省との交渉や設置要員の獲得にも精力的に飛び回っていた。どのような科目編成とするか、どのような点で特色を出すのか、そして法学科とどの様な関係にするのか、大いに議論をした。折角作

られる新学科であるから、ともに新学科を良いものにしようという思いが強かったからでもあろうが、鈴木教授の新学科にかける思いはより一層際立っていた。ただ、その熱心さが行き過ぎ、時に独断専行となって現れ、私とも意見の対立を見ることもしばしばあった。新学科の設置認可が下りた際には、正直、これで議論しなくても良いとホッとしたものだった。

しかし、鈴木教授が凄いの、その完成後も新学科の学科長としてまた学部運営の任に就いたという点である。自分の思い描いた学科を実現しようという意思が強く、そして実際に作った学科についての思いが強かったのだろう。こうした彼のバイタリティには目を見張るものがある。今から思えば、ここでのハード・ワークが後に崇ったのかもしれない。あるいは、その後の全学的な大学改革の流れの中で、法学部が一学科へと統合されたことに落胆したことが禍したのかもしれない。しかし、大学も時代の大きな流れの中にあるのは否めないし、その後の経過はどうであれ、実際に新学科は設立されたのである。その点からすれば、それだけ自分の思いを大学教育に掛けられたというのは大学人として充実していた人生であったと言うこともできるのではないだろうか。

いずれにしろ、こうした形で鈴木教授の大学人としての生き方に思いを致すとき、己の大学人としての在り方への反省を迫られることにもなる。学部教育の在り方は、学生にとって重要なものであるというのみならず、その実現に向けて精魂を傾けた者がいるのだから、それを受け継ぎ、担う我々には、その者にとっても大きな責任があるということが分かってくるのである。

鈴木教授のご冥福を心より祈る次第である。